

第4章 学生の受け入れ

【到達目標】 学生は、本学理念の担い手として重要な構成員であり、学生の確保は必須の目標である。さらに大学全入時代にあつて、定員数の学生を継続的に確保することは、私学としての財政的基盤を確立する上で重要な課題である。このためには、高校新規卒業者ばかりでなく、シニア世代、社会人、留学生など、それぞれの学部・学科の理念に相応しい学生を受け入れる必要がある。

本学の「アドミッションズポリシー」(小冊子)においては、学生選抜の基本方針について「能力の『選抜』をするのではなく、本学の教育を理解して将来に夢をもち、意欲的に取り組むことのできる学生を『見出す』ことを目指している」と述べられている。さらに、勉学意欲に溢れた学生、語学、スポーツ活動、ボランティア活動、キリスト教文化活動等の特定の分野に秀でた能力を持つ学生など、画一的でない多様な資質を持った学生を柔軟に受け入れるためには、そのための広報活動や選抜方法などの整備が必要である。

以上を踏まえて、本章では以下に示す点を特に意識した点検・評価を行う。

- ① 大学の理念に相応しいアドミッションズポリシーが明確に示されているか。
- ② アドミッションズポリシーに適合した学生選抜が行われているか。
- ③ 学生定員に相応しい入学者数の受け入れが行われているか。
- ③ 退学者を減らすために、適切な対策が講じられているか。

1 入学者受け入れ方針等

1) 入学者受け入れ基本方針

(A群:入学者受け入れ方針と大学の理念・教育目標との関係)

【現状の説明】 学生を受け入れるという大学教育における最も初期の段階での行為は、大学存在に関わる最も重要な問題の一つである。どのような学生を受け入れるかということは、大学自身が自己の存在にどのような意味づけをするかという間に自ら答えるものであり、そのため、学生の受け入れには、大学としての確固たる方針の下に、常に緊張感を持って当たることは言うまでもない。

一般に、大学が良い知的財産として卒業生を社会に送り出すために、できるだけ良い素材である入学者を選抜しようとするのは自然の成り行きである。しかし、大学の長い歴史において、この素材選びとも言える入学試験は、その素材がどの程度の知識を有しているか、あるいは与えられた課題をいかに速く、正確に解決することができるか、ということなどが選抜の尺度とされてきたのである。すなわち、大量の素材を同一の選抜基準で判定し受け入れてきた。そして、このような同一基準で選抜された同一の素材を4年間の大学教育という製造・加工行程を経て、卒業生として世に送り出してきた。し

たがって、このような教育を経てきた卒業生は多くの知識量と同一の高い品質を有する人材として評価されてきた。

しかし、この同一の素材を同一の品質を持った完成品である人材に育てるという教育のあり方には大きな問題がある。それは人間という素材は決して同一ではありえない、ということである。そこで本学では、受験生の潜在的素質を見いだそうとするならば、そのための教育活動はそれに合わせて多様なものでなければならない、という前提のもと教育活動を行い、また入学者選抜を行っている。聖学院大学の理念第9条には「学生は、知的、実践的のみならず霊的次元において成熟し、かつ専門の学問の研鑽とその応用力の修得に努め、現代社会の課題に取組み、明日の社会を担い得る教養と良識を身につけ、豊かで個性的な人格形成に努めることが期待される。」とあるように、学生一人一人を、個人としての主体性を持った人間として教育し、人格形成に至らせることを教育目標の中心命題としている。それゆえ、本学の入学者選抜においては、異なる素材、言い換えれば潜在的素質を見だし、受け入れることを具現化する方法を常に模索してきた。

その観点から、本学のアドミッションズポリシーにおいては、学生選抜の基本方針が「能力の『選抜』をするのではなく、本学の教育を理解して将来に夢をもち、意欲的に取り組むことのできる学生を『見出す』ことを目指して作られています。」と述べられている。

本学ではこのような基本方針に基づき、多様な潜在能力を持つ受験生を選抜すべく、多種多様な選抜方法を取り入れている。その詳細は次節で述べるが、ここでは、建学の精神や大学の理念と深く関わるクリスチャン推薦入学制度と、キリスト教主義高等学校および法人内高等学校を対象とする推薦入学制度について触れる。

クリスチャン推薦は、入学後本学のキリスト教諸活動に率先して参加し、またキリスト教関連諸学生団体において指導的役割を担える学生を養成することを意図しており、チャプレンが当該学科教員と共に丁寧に面接した上、入学を許可している（2006年度実績は8名）。

また、本学はキリスト教学校教育同盟に加盟しているが、同じプロテスタント・キリスト教を建学の精神に掲げる加盟校の高等学校からは、指定校推薦の枠内で優先して学生を受け入れており、クリスチャン推薦同様、本学のキリスト教諸活動を学生の側から支える人材として期待されている（2006年度実績は20名）。さらにこれとは別に、開学以来法人内の聖学院高等学校、女子聖学院高等学校を対象とする推薦制度を設けている。この制度は、法人内一貫教育の完成を目指すものとして、本学院のスクール・モットーである「神を仰ぎ人に仕う」人材の育成に貢献することを目的としている（2006年度実績は聖学院高等学校については19名。女子聖学院高等学校については11名）。

【点検・評価】 本学の入学試験における学生選考・選抜方法は、以降の項目でそれぞれ説明するように、本学がキリスト教大学として掲げる理念においていかなる人材を受け入れ、教育し、

第4章 学生の受け入れ

どのような人材を世に送り出そうとしているかの直接的な意思表示である。

本学の入試制度では、一回の入試で多くの人数を一括して受け入れるという方法ではなく、小刻みに多種多様な入試を繰り返し、その一つ一つにおいて丁寧に少人数を受け入れる方法をとっている。特にAO入試は入学希望者と大学教員との面談を繰り返しながら、本学への入学への希望を確固たるものへと育てる入試方法であり、この時点で既に大学での教育が開始されていると言って良い。また、筆記試験による一般入試についても、入試問題はいわゆる受験技術を求めるものではない。単なる知識量を量るのではなく、これまでの学習成果を見極め、入学後の教育指導に結びつけられることを目標としている。このように、本学における学生の受け入れの方針は、キリスト教に基づく人間教育をその教育的使命と考える建学の精神や大学の理念と一致しており、評価できるものである。クリスチャン推薦、キリスト教主義高等学校指定校推薦、法人内高等学校推薦などの入試は、キリスト教を基礎とした大学教育を目指す本学の真摯な姿勢と、本学に是非入学して勉学や諸活動に励みたいという強い動機を持った学生の希望が合致し、双方の希望を実現させるための制度的役割を果たしていると言える。また、多様な入試方法を採用していることは、受験生を同一の基準で選抜するのではなく、個人としての多様性を認め、異なる素材の可能性を見いだす方法として適切であると言える。

【課題・方策】 日本全体の受験生人口が大幅に減少している。そのため各大学では受験生確保のために入試制度の多様化、柔軟な運用、推薦入試やAO入試枠の拡大など、様々な努力を払っている。本学においても受験生減少の影響は避けられず、そのような状況の中で定員確保への努力が払われている。しかし逆に言うと、このような時にこそ、これまでの偏差値輪切りの大学受験制度を打破し、各大学の特色を活かした学生募集を行えるとも言える。その観点からは、広報活動を通して建学の精神や大学の理念を受験生へ周知する働きかけは、今後益々重要になるものと考えられる。またその活動は単に受験者数を増やすためのものとしてではなく、本学の理念を理解し、目的意識を明確に持った受験者を見いだすためのものとして行われるべきであろう。

さらに、このような多様な入試制度の運営には、多くの教員・職員が熱意を持って対応しているために成り立っていることである。今後もこのような協力を得るためには、大学の理念や教育目標が全教員・職員の間で共有される必要がある。